

図書館、デジタルライブラリ、 コミュニティ

杉本重雄

図書館情報学系教授 知的コミュニティ基盤研究センター

筆者は、情報工学の出身で1983年に図書館情報大学に赴任し、それ以来、足かけ20年づくばで暮らしている。現在は、昨年10月の図書館情報大学・筑波大学統合時に発足した知的コミュニティ基盤研究センター（Research Center for Knowledge Communities）に所属している。図書館情報大学に赴任して最初の10年はソフトウェアに関する研究が中心であったが、この10年ほどはDigital Library（電子図書館、デジタル図書館、デジタルライブラリ）を中心に研究を進めてきた。この研究活動に関連して国内外の図書館関係の人たちと会う機会を多く得ることができ、その中でいろいろなことを学べたように思う。ここでは、筆者のこれまでの経験に基づいて、図書館あるいは図書館情報学、インターネット時代の新しい図書館サービスとしてのデジタルライブラリ、そして新しい研究センターの研究対象となるネットワーク上のコミュニ

ティに関して、筆者の思いを書いてみたい。

【図書館、そして図書館情報学について】

「図書館は情報の宇宙!」。これは10年あまり前に筆者が高校生向けの大学案内のパンフレットの編集を担当したときに使ったフレーズである。多くの人にとって、「図書館」ということはからはどうしても「館」のイメージが強い。特に高校生にとっては公共図書館や学校の図書室のイメージが強いと思える。そのため、「館」や「書物」と、「情報」ひいては「コンピュータ」とのつながりを想像しにくいであろうと考えていた。このフレーズは、「図書館は単に本を置いてある場所ではなくて、本の形で表された知識や情報を置いている場所なんだよ」というメッセージのつもりであった。また、以前、就職活動で企業を訪問した学生が「図書館情報大学?どんなこと勉強してるんですか?」といった質問を受け

たという話をしばしば聞いた。おそらく「図書館学」でも、「情報学」でもこうした質問は出なかったのであろう。

我々は、知識や情報を、紙やものを使って作られた「書物」として表現してきた。印刷技術など無かった古代にはじまり、グーテンベルクによる印刷技術の発明、産業革命以降の印刷技術の発達、そして最近のデジタル情報技術の発展によって書物そのもののかたちが変わるとともに、我々の社会の中での書物の位置付けや使われ方も変わってきた。図書館は、書物がごく一握りの貴族や学者だけのものであった時代から、時代とともに変化しながら、現代に至るまで、書き表された様々な知識を蓄積し、利用者に提供してきた。特に、デジタル情報技術を用いた出版とネットワークの発展による情報流通の形態の変化が激しい現代、図書館はこれまで以上に大きな変化に直面しているといえる。

一概に図書館といっても、大学図書館、企業や研究所の図書館、国立図書館、公共図書館など、異なる特徴を持つものがある。たとえば、大学図書館と公共図書館はかなり異なるように見える。研究者のために学術雑誌を提供し、講義で必要な図書や資料を提供することと、地域の資料や子供向けの資料を多数収集

し、子供向けのお話し会や地域向けのイベントを催すことは、情報と人を結びつけるという観点からは同じ機能である。歴史的あるいは設立の背景の違いはあるにしても、図書館の間の違いは図書館がサービスするコミュニティの違い、あるいはコミュニティが必要とする情報の違いから生じていると思う。

筆者は、図書館の役割は、時と場所の隔たりを越えて情報を必要とする人に適切な情報を提供することであると理解している。また、見方を変えると、知識や情報を発信する人とそれを必要とする人を結び、さらに新たな知識や情報を作り出すための場を提供することが図書館の役割であるとも言える。図書館がこうした役割を果たしていくことができるように人、社会、技術といった総合的な観点から研究を進めてきたのが図書館情報学の分野なのであろう。

【図書館とインターネット、そしてデジタルライブラリ】

インターネットの爆発的発展は我々が情報を探す際の行動パターンに大きな影響を及ぼした。GoogleやYahoo!などのサービスを使って情報を探している人は多いと思う。いわばインターネットを図書館代わりに利用しているのである。一方、こうしたサービスでうまく欲しいも

のが見つからないという経験をした人も多いと思う。Googleのページを見ると30億ページが検索できると書いてある。資料の種類や質の違いを無視しなければならないが、これだけの数の所蔵資料を持つ図書館は現在のところ無いと思う。また、図書館で収集された資料の場合、それなりの品質は保証されるといえるが、インターネットで見つかる資料を適切に利用するには、内容の吟味をできることが利用者に強く求められる。

インターネットの発展によって、利用者の情報アクセス環境が変化し、そして出版と流通のプロセスも変化した。この変化は、図書館に対して電子的コンテンツに関する種々のサービス、すなわち電子図書館機能への要求をもたらした。電子図書館は、従来の図書館とはかなり異なり、図書館で提供されてきたサービスをネット上に実現しようとしたものである。そのため、書物・資料を物理的に集めて蓄積した「館」を必要としない。ところが、「電子図書館」ということばを使うと「館」のイメージから抜けきれない感じがする。何か良いことばはないかと考えるが、なかなか適切なことばが思い浮かばない。そこで、筆者自身は英語のままのDigital Libraryということばをよく使う。ここではデジタルライブラ

りとカタカナ書きにした。

出版物が電子化されることで、図書館は必然的にデジタルライブラリサービスを進めなければならないとなっている。現在、大学の中ではネットワークは当たり前のものとして利用されている。そのため、図書館のサービスをネットワーク上に実現することは当たり前のことであるといえる。また、研究室や教室だけではなく、WWWやメールは多くの人の日常生活に入り込んでいる。デジタルライブラリは図書館のサービスを利用者に近づけるための手段でもある。

大学図書館を中心として、既にデジタルライブラリは現実のサービスとなっている。しかしながら、出版物が電子化し、ネットワーク経由で出版物を利用するようになったことで新たに生じてきた問題もある。知的財産権やプライバシー保護の問題は代表的なものである。こうした問題の中で図書館に特有と思われるものに電子出版された資料の保存の難しさの問題がある。資料を収集し、長期に渡って保存することは図書館にとって基幹的な機能である。デジタル情報技術の進歩は早く、たとえば3年という期間はコンピュータにとっては十分長い時間である。ところが、図書館にとって10年、あるいは30年というのはそんなに長

い期間ではない。電子出版物を利用できる状態で保存するには、資料の利用環境そのものを保存することになりかねない。しかし、これは容易ではない。また、ネットワーク上で発信される資料の中にも価値の高いものが含まれる。そうした資料をいかにして収集し、保存していくのかもこれからの課題である。現代の文化を後世に伝えるという図書館に期待される役割の視点からは大きな問題である。

[ネットワーク、デジタルライブラリ、そしてコミュニティ]

コミュニティは地域や職域など、いわば顔を合わす環境を共有する人たちによって形成されてきた。一方、インターネットの広がりによって、顔を合わさなくても情報を交換し、知識を共有できる環境を持つことが誰にでも可能になった。この変化によって従来のコミュニティが影響を受けただけではなく、共通の関心対象を持つコミュニティが形成されるようになった。筆者が所属する知的コミュニティ基盤研究センターは、コミュニティの活動を支える情報技術と情報技術を利用するための知識の共有や流通に関する研究などを行うことを目的としている。

図書館は大学や地域のコミュニティの

ために知識と情報を蓄積し、提供してきた。デジタルライブラリは従来のコミュニティのみならず、ネットワーク上のコミュニティに対して図書館機能を提供することが求められる。一方、ネットワーク上のコミュニティが発達することで新しいライブラリサービスが求められることになる。また、現実の世界の中にあるコミュニティの側から見ても、ネットワークを利用した活動の中で、コミュニティが持つ知識や情報を共有し、利用するためのコミュニティのための知識のセンターが求められる。センターといっても、従来の図書館や公民館といった「硬い」センターである必要は無く、コミュニティの変化に合わせてどんどん変化していくことのできる「柔らかい」センターが求められる。新しい要求は実際の活動の中で見出されていくことになり、そこでは、従来とは異なる要求が出てくると思われる。そのため、実際の社会の中のコミュニティと連携しながら研究を進めることが求められると考えている。

(すぎもとしげお 図書館情報メディア専攻)